
夢の生まれる場所、心龍の目覚め

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の生まれる場所、心龍の目覚め

【Zコード】

Z0054F

【作者名】

雨月

【あらすじ】

親戚の木曾家にやつてきた天道時時雨。転校した高校でも友人が出来、日々が普通だつた。だが、彼が来た時点で既に異変は起つており、渦中にいた時雨は一人の大事な友人と一度と会えなくなってしまう。（第一話～第十話）

プロローグ／第一話 わあ、はじめてか物語のプロローグを（前書き）

さて、いよいよ始まりました。はじめまして、雨月といいます……。もつとも、知っている人もいるとは思いますけど……いや、知らない人のほうが多いかもしれませんね。まだ、第一話ですので話が見えてこない……。ということもあるかもしれません、そんなときは教えてくれると非常に助かります。雨月の小説の半分は読者のメッセージや感想で出来ています。

プロローグ／第一話 わあ、はじめようか物語のプロローグを

プロローグ、

比較的大きめの日本家屋。

年季の入っているその家の門の前に一つの軽自動車が動きを止める。年季が入っているのかところどころから黒い煙を吐き出しているのだが、元気翼噴出すところを見るとまだ走れることを自己主張しているようだつた。それに、ところどころに修理や改造されたような後が多く見受けられる。そして、そんな車が完璧に動きを止めてがちやりといつ音が聞こえてくる。

「…………」

後ろの扉を開けて出てきたのはボストンバックを肩にかけた十七歳ほどの少年だつた。

あたりをきょろきょろと眺めた後に車のほうを振り返つて手を振つた。

それを合図にしたのか、車の運転席に乗っている人物はクラクションを一回だけ押してから再び黒い煙を上げている車のエンジンを入れて田んぼの道を去つていく。

制限速度を見事に振り切つた走行でこれまで毎回毎回それを見ていた少年はあの車がここに来る前に警察に見つからないかひやひやしたが少なくとも彼が見ている間は警察が張り込んでいるという様子はなかつた。山道のカーチェイスほど恐いものはなかつた。あれは心臓がギブアップをしても情状酌量の余地があると彼だつておもつている。

「…………」

砂埃と今にも壊れそうな……ねじが足元に落ちていることに気がついたがどうしようないので黙つたままだつた……音を響かせて去つていった車に不安そうな顔をした少年は何度かためらうよなそぶりを見せて遂に後ろ髪をひかれることなく潔く呼び鈴を押し

た。無論、先ほどのことではなくこれからのことである。呼び鈴は最近つけたのかまだまだ真新しくて汚れなどは確認されない。しみじみとそれを眺めているとすぐに玄関をガラガラと開けるような音が聞こえてきて少年の目の前にある門が開けられる。

現れたのは着物を着た女性だった。

見た目はとても若く感じられ、物腰も上品そうである。

しかし、彼の母親と顔がそっくりなのできっと怒ると非常に恐いのだろうと彼はおもつて頭を下げた。彼としては毎朝毎朝叩かれて起こされているので双子である目の前の人物に会うのは久しぶりではない気がしないでもないのだがそれでも、久しぶりに会う。それこそ五年ぶりぐらいにはなるだろう。彼の母親は怠惰で料理も作らないのだがこつちは料理の本にも何回か載っていた気がする。

少しの間思い出話をする…………といつても、先ほどの車のことぐらいたつたが…………と、一人はそのまま門の内側へとはいっていった。そして、その後に残つたものは静かな田舎の春の風だけだった。おもわれたが…………彼にまつているものは確実に彼の人生をおかしな方向へと直線的に進めてくれるというこの町のおかしな話だった。

第一話、

「ふう、疲れた…………」

新しく僕の部屋となつた部屋をちらりと一瞥する。まだまだ封を切られていらないダンボールが今か今かと開けられるのをまつていることだろう。

しかし、僕はダンボールを開けることなく既に運ばれてきていた机の椅子に座つて今日あつたことを思い出していた。

「あ…………お前らももつ知つてているとは思つが、今日この教室に新たな仲間がくることになつた。天道時、挨拶してやれ」

そういうつて先生は僕のほうへと視線を向ける。

廊下にいたころから考えていた台詞を口の中で反芻すると頷いて口を開いた。こういうときは後ろの掲示物に集中してしゃべるのが口であると転校が多かつた以前いた学校の先輩が僕に教えてくれた。その後、その先輩はすぐに引っ越してしまったが……噂ではなにやら黒いことをしてて警察に目をつけられたらしい。

「……葉野間高校から転校してきた天道時時雨です。これから、よろしくお願ひします」

僕がそう言うと同時に朝のH.Rを終了するチャイムが鳴り響く。一気に教室中は騒がしくなり、それを制して先生は言った。

「じゃあ、各自一時間目の大掃除に備えておくよーに!」

今日から一年生で、本日のこの高校の行事は校長先生の長い話があるということなのだろう。僕の以前いた高校では校長先生だけの話で軽く一時間は越えてしまったという恐ろしい話が語り継がれている。今では十分ぐらいで他の先生方が止めるといつちょっとおかしな光景を見ることになるのだが、はたして、この学校ではどうなのだろうか？

「天道時、あそこがお前の席だ」

このクラスは北側に廊下があつて北側に一番近い席が女子で次が男子、それ以降が男女が隣同士になるようになつていてるという席順のようだ。僕の席となるのは一番南側の一番後ろ。ちょうど女子が一人で座っているような場所だった。

休み時間になり、時間に束縛されてている高校生たちが自由の羽を広げて僕のところへとやつてきた。

速効で話しかけてきたのは前の席に座つていた男子でどうやらこのクラスの席順は出席番号で決められていないようで自由に決められたのか五十音順では並んでいない。珍しいといえば珍しいのだが

何か裏がありそうだ。

「やあ、どうも、僕の名前は霜崎剣治だ。呼び方は君が自由に決めてかまわないよ。なれなれしいかい？いいや、なれなれしくなんて

ないのさ、剣治と呼んでくれるとフレンドリーでいいと思つね

「あ、うんじやあそう呼ばせてもらひうよ」

眼鏡をかけていてインテリそうな男子（剣治）もいれば、それを脇からどかすようにして似たような顔をした女子が顔を覗かせる。なんとなく、先ほどの剣治という男子生徒に似ている様な気がしないでもない。くせつげが頭のとっぺんにあって二コ二コしてい るような印象を受ける。

「私、霜崎亜美！これからよろしくね？呼び方は何でもいいよ、そ この剣治みたいに名前で呼んでくれたつてかまわないから」

「え、うん……よろしく」

その後も段々と人が増えてきてなんともまあ、このクラス三十九名の九割が僕に話しかけてくれたのだった。ここより都会の高校に通っていたのだが、そこでは色々とあってあわただしく過ごしていったのを思い出す。そのときは見事に村人Aみたいな感じで日々を生活していたような気がする。

この学校では式の前には毎回毎回掃除があるようで、大掃除となつた。大掃除では霜崎亜美、霜崎剣治たちの班に入つて校庭の掃除をすることとなり、若干の不安と多量の楽しみがプラスされてまあ、プラスの要素のほうが大きい。掃除もあっさりと終わってしまい、することも特ないので壁にもたれて話すこととなつたのだが

.....

「へえ、天道時君つて部活には入つてなかつたんだ？」

「うん、入つてもなんだか活躍できる気がしなかつたからね」

「ふむ、そんなことなら今日から生徒会に入つてみないかい？君の ような従順そうでおとなしそうな雑用が……こほん、お手伝い君 が一人ばかり欲しいなつて会議でも出でていた頃なんだ」

霜崎剣治はどうやら生徒会長のようだ。僕は肩をすくめてそれを遠慮させてもらつた。きっと、この人物は嘘をいわないような素直な性格をしているに違いない。

「だけどまあ、何か部活には入つていたほうがいいかもしないよ

？」

霜崎さんはそんなことを言つている。表情が険しいのは気のせいだろうか？何故か勉強せずに受けたこととなつた中間、期末テストを思い出させる。そういうばらくな点数はとれなかつたな……

「そうだね、確かにそれはいい提案かもしれない」

剣治もそんなことを言つている。その表情は軽い気持ちで不良をからかつて停学沙汰にまで発生してしまつたときのような顔をしている。

「へ？ 何で？」

当然のようには僕はそれに対しきよとんとしてしまつた。僕の疑問を解決しようと剣治が首をすくめて答えた。

「『』の高校、文武両道を目指しているらしくってね…… 部活に入つていらない連中はそれなら勉強まつしぐらだ！ つて使つていらない特別教室とかに押し込まれて午後六時半ぐらいまでずっと勉強しないといけないのさ。ま、今のところ帰宅部に所属している連中は一人もいないんだけどね」

霜崎さんも頷いて続ける。

「全員が適当な部活に入つてんの。今じゃ、公認されていない同好会……『世界探求同好会』とか『日がなごろごろ同好会』に『召喚同好会』つて意味ふめぐな同好会まで出来上がつちゃつてそこに皆入つちゃつてるんだよ。あとは適当な部活の幽霊部員」

「へえ、大変なんだね……」

霜崎さんが言い終えると再び剣治がどこからか生徒会入部！ とか書かれた紙を取り出した。

「で、そこで生徒会！ 生徒会メンバーは今のところ五十七名いるんだけど……」

「そんないいの！？」

「ま、ここも相当ゆるゆるなところだからね。仕事をしていない人も多い…… ま、まあ、私はそつじやないんだけどね～」

そう語るのは霜崎さんである。目を泳がせているところを見ると

彼女もそのお仕事をしてくれていらない人のひとりに違いない。

「今じゃ第一生徒会を作ろう!とか分裂の危機にあるのさ。ま、考えておいてくれよ」

「ふ~ん」

渡された紙をポケットになおして再び談笑をしていると先生に見つかって怒られてしまった。しかも、気がついてみれば怒られているのは僕と霜崎さんだけだった。先生はそのことに気がついてない……というより、もとよりそこに剣治がいたことを知らなかつたような感じがする。

「あ~つたく、また剣治の奴どこ行きやがったんだあ!」

先生のお叱りが終わり、腕をグーにして空へと叫んでいる霜崎さんに僕はため息をついていた。

「剣治つていつもこうなの?」

「ん? そうだよ。うちの従兄はいつもこんな感じ……巻き込まれるときはいつもいなって所だね。責任転嫁は得意だし、口はめちゃくちゃ強いよ。あいつが怒られていることはみたことがないなあ……」

ここで気がついたのだがどうやら霜崎さんと剣治は従兄妹だったようだ。

「ま、とつあえず急いで体育館に向かおう!」

「そりだつたね!」

僕と霜崎さんは一人で体育館へと向かい走り始めたのだった。

「あのや、天道時君の家つてどこ?」

「ん~家つて言うよりも居候つて感じなんだけどね……木曽さんつてところの家。近くに公園とか田んぼとかがあつたような……」

「ーー?」

そういうとめちゃくちゃ驚いた顔をする霜崎さん。どうかしたのだろうか?

「あ、あ~……なるほど。ところでさ、天道時君は……」

「ほおらー君たち早く行かないと式、始まってしまうぞ」

先生の口調を真似したらしい剣治がいきなり姿を現した。まるで忍者か影の刺客だ。きっと江戸時代ごろに生きていたら伊賀の忍者が甲賀の忍者の頭目ぐらしにはなれたかもしれない。

「！？」

「剣治！？どつから湧いたの！？」

「心外だな……ずっと君たちの後ろにいたじゃないか」

そういうてさも『心が傷つきました！悪いのはこの一人です！』といった表情をしてみせる剣治に霜崎さんが走りながら鉄拳を食らわせようとしたが、それをさらりとかわす剣治。むう、無駄な動きを霜崎さんはしていないところを見ると何か習つていいのだろうか？それに、剣治もその一撃を軽く避けたところを見るとただものではないかもしけない。

「避けない！きちんとあたりなさい！そんで、鼻血を撒き散らしない！」

「H A H A H A H A、避ける？避けてないよ、君のパンチが的確な場所を捉えなかつたからあたらなかつただけや……時雨君だつたらパンチよりもパンチラで鼻血出しそうだけじね

「ちょ、ちょっとどどいう意味だよ！」

確実に相手を馬鹿にしているような表情をする剣治。彼は去つてしまつた。そして、その言葉でスイッチが入つたのか目つきを変えた霜崎さんがそれを追いかけて廊下を曲がつて……

ガターン！

「やばつ！！」

そんな音が聞こえてきた。そして、霜崎さんのものであろう足音があつといつ間にしなくなつた。ダダダダ……といつ擬音が聞こえてきそつでなんとなくアニメ風だな～とおもつてしまつた。

「？」

霜崎さんを追つて廊下を曲がつてみると頭から何故かバケツを被

つて震えている僕の担任の先生が立っていた。心なしか、ここにいる
とやばい気がする。

「…………」

「戦う、仲間、魔法、逃げる……逃げる！

「ちょっと待て！」

しかし、回り込まれてしまつた。く……体育教師という肩書き
は伊達ではなかつたようだ。すばらしいフットワークである。

「天道時、お前が犯人か！…………しかし、転校してきたばかりのお
前とは考えられないな…………ああ、そういえばあの二人組みと早速
釣るんで……違うなら犯人を言え！」

そんな……友達を売ることなんて僕には出来ない！

友達のことを思つてゐる僕のことをどう思つたのか先生は続ける。
「さもないと、反省文を二十枚書かせるからな！もう一度言つぞ、
お前が犯人か？」

「いいえ、霜崎亜美さんが犯人です」

友達？残念ながらこの高校に来てまだ出来てないんだ

こうして僕は体育館へと入り、その代わりとして連れ出される霜
崎さんを見送ることなく校長先生の話を聞いていたのだった。無論、
彼女の目から発せられる非難の視線を僕が見るわけがなかつた。

「まったくもう！酷いよ、天道時君！」

「いや、酷いのは剣治だと思うんだけど…………」

放課後、家が近いとのことだったので僕とともに一人は帰つてくれる
こととなつた。

このままで、霜崎さんが見せた悪鬼のよつな顔が僕に向けられ
るかもしれないのに慌てて話題をそらした。いや、既に向けられて
いる気がしないでもない。

「あ、それよりさ……霜崎さん何か言おうとしてなかつた？」

「へ？何を？な、何のことだっけ？」

彼女が何かをはぐらかそうとしているよつには見えないので本気

で忘れているだけなのだろう。

「ほら、木曾さんちつて面おひとじしていたときだけ……」

「あ、あ……あれね」

「どうしたものだらうかと、うつ表情を僕に見せたのだが、剣治がそれをさえぎった。

「それはまた今度教えてあげるよ、この僕がじきじきにね……西美さあ、言葉にも力はあるんだよ、時雨君が該当しちやつたりびつするんだい？ これ以上警察の仕事を増やしちゃ駄目だよ？ わかった？」

「…………その点はまあ、反省します」

「ん～？ ちみい～本当にかい？」

「無駄に偉そうだ。

「偉いんだよ、僕は…………生徒会長、それはすべての生徒の上に君臨する帝王なのさ」

つぐづぐ恐ろしい男と友達になつてしまつたかも知れないと思いつ悔したのは既に遅い。後から悔やむから後悔なのだろう、感じのいいお勉強となつた。

「ま、それはともかく…………といあえず、ここで話すにはちょうど危ないからね」

「危ない？ そんなにやばげな話なの？」

不思議に思つてそれも聞きなおそうとしたんだが……

「じゃ、ばいばい」

霜崎剣治家に到着したようだ、剣治は一方的に別れを告げると家中へと入つていつてしまつた。

「…………行つちやつた」

「うん、行つちやつたね」

残されたのは僕と霜崎さん。霜崎さんなら少しごらうに知つているだろうと思つて聞こうとしたのだが……

「あら、亜美じやないの」

「あー母さん！？」

車が近くに止まつて窓から顔を覗かせてくる一人のおばさんがいた。成る程、霜崎さんが成長したらこんな感じになるかもしれないといった雰囲気をにおわせるものだった。

じゅじゅと僕のことを眺めた後におばさんは言った。

「あ～……悪いわね、『デートのところを邪魔したみたいで』

「ち、違つわよ！彼は今日から同じクラスになつた天道時時雨君よ！」

慌てて母親に告げる霜崎さんに僕はその母親に頭を下げる。

「どうも、天道時時雨です」

「あら～、単なる同級生だったか…………どう～うの息子にならない？」

「は？」

いきなりの展開で読めなかつたが慣れっこなのか霜崎さんは亜美母をせかす。

「もう、そんなことよ～…………といひで、お母さん今日何か用事でもあるの？」

よくよく見てみれば他にも数名、人がこの霜崎家にやつてきているようであった。

「ああ、ちょっとね…………狐面関係…………おつと、口が滑つちゃつた」

「狐面？」

首をかしげた僕を見て苦笑している亜美母。

「亜美もついでにちよつと来なさい」

「え？ 私も？…………じゃ、天道時君また明日ね？」

「え？ うん」

剣治の家の中に入つて僕は木曾家へと帰路についたのだった。その途中、僕は電柱の近くで一つのお面を拾つた。

「ん？」

それは狐のお面だつた。汚れていて額の部分に穴が一つ開いているものだ。しかし、どことなく拾うと呪われるような代物だと感じ

た僕はそれを放り投げておいた。うん、どちらかといふとこっちのほうが呪われそうかもしれないなあと後になつて気がついた。木曾家に帰り着くと、誰もいないようだ。まだ比較的はやめの時間帯なのでまだ誰も家に帰つてきていないだけのようだが……

「ふう……」

僕の自室となつた部屋に入り、少しばかり息をついた。

第一話 わあ、続けよつかいのお話 (前書き)

第一話ですね。ええと、これより先、雨月始まって以来のスピード完結を目指したいと思います!

第一話 わあ、續けよつかいのお話を

第一話

「……」で、回想と今どがつながった。

「…………お茶でも飲もうかな」

お茶を飲むために自室を出ると、カサリといつ音がした。ビリヤ
ら何かを踏んでしまったようだった。何か大事なものだつたらそれ
こそ一大事だ。僕は慌てて下を見やる。

「？」

拾つてみるとそれはこの家の間取図のものらしい。面白そ
うだったので詳しく見ることにした。どこかに宝とかがあるとかは
ざつと見てかかれていないようだつたので今度はじっくりと見るこ
とにした。意外とこういう間取図とか好きなのでその昔あつていた
土曜の朝のとある番組などは欠かさず見ていた。

「ん？」

僕に「与えられた部屋の近くには『鬼面の間』といつものがある。
さて、まだこの家の内部を歩いたことなんて殆ど無い。誰もいない
うちに勝手に歩くのもどうかと思うのだが……『鬼面の間』とい
う部屋が気になつたので行くことにした。この間取図には『用無き
者立ち入るべからず』と書かれているのが気になるのだが……

「…………鬼のたたりだぞお！」

「うをつ！？」

いきなり右肩をつかまれて慌てて振り返る。

「うわつ！？」

そこには赤鬼がいた！つと思つたのだが……それは単なるお面
だつた。

そう、鬼面をつけた木曽家の一人娘…………木曽焰華がいたのだつ
た。

身長が僕より頭一つ分小さく、若干つり目で恐そうな印象を受ける

のだがその中身は人懷つこい。そんな彼女の年齢は僕より一歳年下で高校一年生。昨日、この家に来た時点で僕をものめずらしそうに触っていた。まだ会つてまもないといつのに昔からの兄妹みたいな接し方をされるので困つてこる……こや、思えば五年前にもありましたことあるなあ、初めてじゃないじゃん、僕？

「あはは、びっくりした？」

「そりやまあ…………それにしても、その鬼面恐いね？」

「おつと、そういうことをこの鬼面の前にしゃべっちゃ駄目なんだよ？」「

片手を腰つけてそう指さる。ニヤニヤしてこのとこ見ると嘘を言つてゐる可能性がある。

「え？ 何で？」

「顔が恐いつてだけで中身を知らないような人物はこの紅鬼に呪われちゃうんだよ」

ついめしや～とか言いながら僕を脅かそつとしているのだがそれは幽靈ではないのだろうか？ 鬼と幽靈は違うだろ？

「ま、とつあえず時雨君が握つてゐる地図のその部屋、行つてみる？」

間取図のことを地図と言つてゐるといふと彼女は建築関係の仕事は出来なさそうだ。

「え？ いいの？」

間取図を指差すと彼女はそれを僕からかゝつさらつてみる。

「うつわあ…………よつと見てみるとなくなつてたつて思われてたオーリジナルの地図じやん。時雨君、これどうしたの？」

「ここで拾つたんだよ？ てつくり焰華ちゃんが僕を脅かすために置いた物だつて思つたんだけど……」

「ま、いつか…………や、『鬼面の間』はいつです……ちゃんとついてきてくださいね」

バスガイドさんみたに間取図と鬼面を片手に持つて歩き始める。僕もその後を追つて『鬼面の間』へと向かつたのだった。

『鬼面の間』があるのは僕の部屋から三部屋ほど隣の部屋だった。

「イニ」が『鬼面の間』でえーす

即席バスガイドさん（笑顔だけは一級品）はそういうと何もないと壁の前に僕を案内してくれたのだった。

「…………あの、部屋の扉なんてどこにもないけど？」

「ん~ そうだよ。『鬼面の間』って確かに存在するんだけど……入れないんだよ」

「入れない？」

そりやまた不思議な部屋だな…………そこで殺人事件があれば無条件で密室殺人だ。

「五年ぐらい前まではきちんと入れたんだけどね…………鬼が暴れるとか言つて死んだばーちゃんが壁にしちやつたんだ」

首をすくめて焰華ちゃんはそういうと『鬼面の間』の壁に刺さっている釘に鬼面をかけたのだった。もとはそこにあつたのだろう。「とりあえず、今じゃこんな風に鬼の面をかけているだけになつてるんだ」

「へえ、けどその鬼面で遊んでいいの？」

「いいのいいの。どうせ、レプリカだらうからね~ 本物だつて今どこにあるかどうかわからんないし…………贋作多いよ、この世の中」

そういうつてあつちで遊ぼうよと僕の腕を掴むと廊下を引っ張つていつたのだった。

「…………」

なんとなく、鬼面の視線が僕を捉えたような気がしたような気がするが、気のせいかもしれない。それか、疲れているのだろう。今日は色々あつたからなあ。

明日の準備も終わり、僕は自室でうとうとしていた。

カターン!!

「うをーー？」

何か物凄い音が聞こえてきた気がして慌てて目を覚ます。

「…………？」

しかし、部屋の中に何か配置が変わっているようなものはないようだつた。

「………… 気のせい？」

だろうか………… そう思つてそろそろ寝たほうがいいかもしれないとおもつてトイレに行くことにした。トイレの途中には夕方焰華ちゃんに案内された『鬼面の間』がある。まあ、別に部屋の中に入れわけでもないので別にどうとつたわけではないのだが…………。

廊下に出て静かに歩く。もう他の人は寝てしまつているようで静かだつた。

「…………」

『鬼面の間』の廊下にあの鬼面が落ちていた。びつやら、この鬼面が落ちた音が先ほどの正体のようだ。

「…………しつかしまあ…………夜中見ると本当に恐いな…………」

僕がこれまで見たことのある鬼面はどれも頬が膨らみ口が裂けていて金色の目が膨らんでいて角が生えているものなのだが…………僕が手に持つている鬼面は目が落ち窪み、下の歯茎から一本の歯が伸びていて角が短かつた。さつさと鬼面を釘にかけようとしたのだが…………

「…………お？」

ふすまが開く音がした。しかも方向的にいつて焰華ちゃんだらう。そこで夕方のお返しを考えてみた。作戦は単純である。この鬼面をつけて驚かす。シンプルイズザベストプライスつてやつだらう。くくく…………仕返しにはもつてこいの道具がこの場所にはそろつているのだあーー！

「…………にししし…………」

鬼面を顔につけると…………

「お？」

ちよつと『鬼面の間』の壁が視界に入ってきたのだが……そこに壁などなかった。『鬼面の間』の内部が見えるのだ……そこにはなんと、『何か』がいた。あちらはまだこちらのことに気がついていないようなのだが……気が付かれれば何か僕は大事に巻き込まれる……そういつた漠然とした言葉が頭に響き渡った。

『鬼面の間』にいる謎の影に気が付かれないよう静かに静かにまるで泥棒さんのように僕は廊下を歩いていたのだが……

ギン……

「あ……」

年季の入った日本家屋だ……音がするのは当然だらう。しかも、間抜けであんぽんたんみたいな声を出してしまった……僕は鬼面が顔についたままということを忘れたまま、後ろを振り返つてしまい……

『鬼面の間』にいる誰かと目を合わせてしまった。

「時雨君！時雨君！」

「ん？あ……」

誰かにゆすられているような感じがして目を開けてみると、心配そうな焰華ちゃんの顔が目の前にあつた。何かぬるぬるとしたものが口元まで来ていってそれを拭つて暗いながらも目をそれに向けてみると……鼻血が出ていることに気がついた。

「ん？あれ？何で鼻血が……？」

立ち上がり、触つてみると鼻血だけではなく……からだのいたるところから血が流れていることに気がついた。不思議と、痛みはないのが不幸中の幸いだつた。

「血が！血が流れてる！」

「ん？ああ………… そうだね…………」

段々と意識が遠のいていっている気がするのは血が抜けていつて
いるからなのだろう。僕の周りの景色が歪み始めた。いや、逆に痛
みが無いのもおかしいな…………

「時雨君！時雨君！……」

焰華ちゃんの声が徐々に遠のいていき………… 代わりに聞こえて
きたのは恐ろしげな声だった。

『………… 我は鬼と呼ばれし人なり………… 我を最後に殺し、狐面の
女………… あれは鬼に憑かれし鬼病の鬼女なり………… この血、そのと
きに我が流した血のすべて………… このときより、我ら一心同体とな
り、狐面の鬼女、討たんとす！』

そして、目の前にはあの鬼面が向き合つていた。

「！？」

『………… さあ、我と誓え！』

「え？」

徐々に、その鬼面は近づいてくる。

『さあ、ともに！主の体はもう長くは持たない！鬼女を打ち倒して
こそ主の体は解き放たれるのだ…………』

「え………… わ、わかったよ！――」

『…………』

鬼面は姿を消し、僕の目の前に光が戻ってきた。

「………… ふう、もう大丈夫じゃな」

いつの間にかなにやら暗そうな部屋（窓がなく、扉が一つだけあ
る場所）に自分が寝かされているのに気がついた。ろうそくがそろ
そろ命をつきかけているような短さになっていた。そして、僕の四
肢には鎖がつけられていて拘束されているのだった。

「おぬしは鬼に食われるところじやつた」

「鬼に？」

そして、僕を中央にして四人のおばあさんたちが僕を覗き込んで

おり、焰華ちゃんのおじいちゃんが微笑んでいた…………が、その表情が急に険しくなった。

「…………鬼に魅入られたか」

「え？」

「時雨じゅよ、時雨…………鬼と何らかの契約をしたんじゅるう？」

僕は夢の中の出来事かもしれないが、すべてのことをそこにいた全員に話した。鬼面が現れたこと、僕に狐面の鬼女のことなど……所詮は夢のことなのだけれども、焰華ちゃんのおじいちゃんとおばあさんたちは真剣に聞き入っていた。

しゃべり終えると、僕の鎖を取つていった。

「…………その影の中に、鬼はあるのだな？」

「え？」

いきなりそんなことを言われてもさっぱりわからないのだが、確かに僕の陰の中から何かの息遣いが聞こえてくる。

「…………『鬼渡し』が始まるのじゃな」

「え？『鬼渡し』って？」

焰華ちゃんのおじいさんは答えようとせずにこの部屋を出て行つてしまつた。それにならつように殆どのおばあさんがおじいさんの後に続く。

「簡単に言つなら鬼『じゅじゅ』よ…………鬼はおぬし」

「鬼『じゅじゅ』？」

一人だけ残つたおばあさんが答へくれたのだがそれでもよくわからなかつた。

「鬼『じゅじゅ』…………一人が鬼になつて、他の人が逃げるつていつ…………あの遊びですか？」

静かに頷くその顔がろうそくの光に当たられて不気味だつた。ナルチュラルにお化け屋敷で涼みたいという人にはつけてつけであろう、この状況。

「この土地の鬼『じゅじゅ』はちょっと違う…………鬼に魅入られたのなら、調べるがよい。お主が生き残るにはそれしかあるまい…………

この町は皆がお前を混乱させるだろ？が眞実はここでは「つじや」
疑問を抱いた僕をそのままにして残っていたおばあさんもどこか
に去つていった。残された僕は、陰の中の物言わぬ共同人の気配だ
けを感じていたのだった。

同時刻

「…………とうとう『鬼渡し』始まったようだね…………」

誰に言うでもなく、霜崎剣治は話し合いが行われている部屋を抜け出してそう呟いた。外にかすかに見える電柱の上に狐のお面をつけた巫女のような姿を彼は見たような気がした。

「…………鬼は誰かな？ふふつ、楽しみだ」

誰に言うでもなく、彼は呟いて口をほじりぱせた。

第三話 もう、これからが本筋だのねひつね（前書き）

第三部分です。さて、本当にこれから時雨君の運命はどのようなものでじょうか……評価、感想ともに期待してますのでよろしくお願いします。

第三話 わたし、これからどうなるのだ？

第三話

その昔……争乱の日々が続いていた時期があつた。

ある村では代々鬼を退治してきた家系の一人の娘が鬼に体をのつとられ、狐の面をつけて村を荒らしてた……しかしある日、そこにうつろな目をした侍が通りかかり、その鬼を殺したのだった。

村人たちは男に感謝し、男はそのままその村に住み着いたのだが鬼はまだ完璧に死んでなかつた。夜中、男に襲いかかつた鬼は男の右腕を喰らつたのだが何とか男は今度こそ完璧に鬼をしとめ、一度と復活しないように自身の体に封じ込めて自ら命を絶つた。鬼にのつとられていた娘は幸いにも助かり、柄が立てられた男の隣で次の日自殺しているのを発見された。

これが、この村に伝えられている一般的な昔話である。今ではもう、忘れられているといつて間違いないだろうが……

田が覚めるといまいちな感覚だつた……まあ、無理もないだろうな、昨日は学校を休んでずっと寝ていたのだから。

『さあ、我とともに鬼女を斬るのだ』

「う、うん……」

起きているとずつと、そう、ずつと……朝食、トイレ、昼食、トイレ、夕食、お風呂、トイレ……ずっと陰は僕に話しかけていた。他人の影よりも僕の影はいつの間にか濃くなつており、存在感があつた。

「あ～、そのさあ……」

『何だ？』

「どうやって斬るの？』

『…………』

そういうと陰は黙り、この間だけ僕は束の間の休息を与えられた

ような気がした。なんにせよ、今のうちに学校に行く準備をするべきだ。と僕は考えて制服に着替え、焰華ちゃんと一緒に朝食を食べるのだった。

「…………あ、おはよう時雨君……大丈夫？」

「うん、大丈夫……よくあることだから。それより、おはよう焰華ちゃん」

僕が倒れたときに彼女が僕を見つけたのはさうなのだが、鬼の話などは何一つとして話されていなかつた。

知っているのは焰華ちゃんのおじいさんとそのとき周りにいたあの四人のおばあさんたちだけだらう。おじいさんは僕に絶対に焰華には言つてはいけないといつていたし、色々と忠告もされて体中から血が噴出してしまったあれは僕の持病といつことになつてしまつた大出血病という名目となつてゐる。

「前もあんなことがあつたの？」

全身血液ポンプ男だと僕のことを思つてゐるのだろう、焰華ちゃんはそんなことを言い出してきた。僕は危うく味噌汁を噴出すところだつたが飲み込んで答える。

「うん、そうだよ。五年に一回ぐらいあつたつて聞いてるけど……まあ、僕が勝手にそう呼んでるだけでたまたまたつて思つかもしれないけどね」

「ふーん……」

おじいさんは他にも言つていた……

焰華ちゃんのおじいさん、漸増さんの部屋へとやつてきた僕。

「…………あれ？入れない…………」

扉を開けて中に入ろうとするとき体が止まり、背筋が寒くなる。すぐここから逃げ出したくなつたのだが、そのときに漸増さんが部屋の中から出てきた。

「これはもう、『鬼渡し』を終えないとやばいじゃんつて……」

「…………」

漸増さんは黙つてお札を取ると、僕は部屋に入ることが出来た。座るよう促されて正座すると漸増さんはため息をついていった。

「……まさか、うちの焰華が時雨君に鬼面を見せるとはまったく思わなかつた……」

「え? どういう意味ですか? 見たらいけなかつたんですか?」

あれ以降、どこを探しても鬼面が見つからないような気がするのはなぜだろう? 最後に触つたのは間違いなく僕だからあの倒れた場所にあるのだろうと思つたのだがそこにもなかつた。再び焰華ちゃんが持ち出した可能性が無いでもないが……

「ああ、そうじゃな……正確に言つならば鬼面をつけてあの『鬼面の間』をのぞいてはいけなかつたのじゃ……あそこを鬼面をつけたままで見ると鬼が見え、魅入られてしまつのじゃ……焰華の父もそれで死んだ。狐面の鬼女に殺されたんじゃよ。勿論、焰華にはそんなことをいつてはいけないし、表向きじやいまだ行方不明扱いじや……これまで鬼面をつけてあの部屋を覗き込んだものが生きていることは一度もない……部屋を覗き込む権利があるのは鬼面を所有していいる我々の一族の男だけじゃからな……」

黙りこむ僕に漸増さんは言つた。行方不明になるとは聞いているが、死人扱いになるようだ、その鬼面をつけて部屋を見たものは。

「今、鬼面をつけているのは君じゃ」

「鬼面をつけているつて……」

自分の顔を触つてみた……が、どこにも着いていない。

「……硝子を見てみるといいじゃろつ

「?」

あつちの光景が見えるが、一応、反射して僕の顔も……

「! ?」

僕の顔は見えず、鬼面がついていた。あの鬼面である。キモイ……とかいつていたら余計何かに取り付かれたりするかもしないから黙つておくこととしよう。

「わかつたじやらう？そして、耳を澄ましてみると良い……陰がおぬしにささやきかけてくる」

「…………」

急にしーんとなつたかと思つと頭に響き渡るような声が聞こえてきた。

『鬼女を斬れ…………狐面の鬼女を…………』

「…………どうじや？聞こえるだらう？』

「…………ええ」

陰を見ると、色が濃くなつていて頭上に角が生えていた…………。絶句する僕の顔をのぞくことなく漸増さんは続ける。緊張して尿意を感じたのだがそこはぐつと丹田に力をこめてふんばる。

「…………この村には一つ昔話がある」

「昔……話？」

「そうじや、一つ昔話をしてもらひ…………」

漸増さんはしゃべりだした…………

「まだこの村に鬼がおつた頃の話じや…………その鬼を退治していた家系のある娘が鬼に取り付かれてしまつてのう、今度は人の姿をして暴れまくつた。それから村人は外を出歩かんようになつてな、神出鬼没の鬼に代々鬼を退治してきた家系も困つておつたそんなんじや。じやが、そんなるある日…………にこつた目をした一人の男がこの村を訪れた。この家に伝わつてある話では人を殺しすぎて人としての心を失つてしまつたような男だつたらしいのじや。そして、鬼はその男に襲い掛かつたのだが見事に返り討ちにあつて動かなくなつてしまつた…………それを陰から見ていた村人は喜び、とりあえずその男に男を泊めることにしたのじや。じやが、鬼は完全に死んだわけではなかつた…………男が寝たのを確認すると鬼は襲い掛かり、男の右腕を引きちぎつた。男は右腕を引きちぎられたにもかかわらず、痛みという感覚がないのか今度は鬼を完璧に討ち果たした…………そして、何を思ったのか女がつけていた狐の面を被つたのじや。そして、自分の腹に刀を深々と刺してやつてきた村人全員に言った

そうじや……『私はこの娘の家系のもの……鬼は我的体に封じ込めた！我が死んだ後は我的四肢に鎖を繋ぎ、祠にしてこの村の長老が見張るがよい！決して、決して後に出でてくる鬼面で祠に納められた我を見るでないぞ！この娘にも重々言つておけ！』といったのじやよ。長老は男が言つたとおりにことを運ぶことにした。長老は祠を作り、その祠を囲むようにして自宅を作り直したのじや。そして、今この家がそうなのじやよ。それから、様々なものが鬼面を被り、祠を見た……全員が行方不明らしいが、その妻となつたものの夢に行方不明になる前日に必ず出てきていたそうじやな。様々なものといつたが……女が鬼面をつけて部屋を見ても何もなかつた。理由はわからんがどうやらあの男と関係してあるのじやろう……

「……」

黙るしかなかつた。

「……わしはもう追い先短い……時雨君がこの家に来るとき、反対していたと話はきいたじやろ？」

「ええ、まあ……」

母さんは確かに何人かが反対していたと聞いたのだが結局押し切つたと誇らしげに語つていたがまさかこんなことが起こるとは思わなかつた。

「……このままでは時雨君が死んでしまうのは目に見えてわかつておるが……わしの先祖たちも馬鹿ではなかつた……書物などにして残してくれてこりのじやよ」

「本当ですか！」

つまり、もしかしたら助かる方法があるかもしれないということである。

「……これじや、もつていくが良い」「ありがとうござります……」

その書物に載つていたことは色々とあつた。

それはなんとなく“ルール”といった感じのよつたものだった。

一、鬼が鬼女を切る権利は一度だけである。二、『鬼渡し』が始まる時間帯は午前零時から三時間である。三、鬼の身に危険が起るときは段階が踏まれる……一段階目、自分の陰の中の鬼の色が紅くなり、一段階目は他人に角が生えているように見え始める、最後の段階、狐面の鬼女が近づいてくるのがわかる……というものだ。

「ねえ、時雨君、大丈夫？」

「え？ う、うん……」

「何か無理してない？」

「していないよ……大丈夫」

簡単な話、昼は狐面の鬼女が襲つてこない。というのも、行方不明となつた人たち全員が全員、朝になくなつてしているのだ。ルールには鬼が……つまり、僕が鬼女を斬るのは一度だけしか権利がないとかかれていた。これは僕が誰かに刃物を向け、斬りつけるまで狐面の鬼女は僕に襲い掛からない……ということらしい。

今のところ大まかにわかつたことといえばこのくらいなのだが、希望は持つべきだろ。おじいさんも寝る前に言ってくれた。

「……これまで、行方不明になつたものはすべて伴侶がいたんじやよ……まだ学生のみのおぬしならば助かるかもしれないじゃろう？ 時雨君、君には彼女はいるかね？」

「いえ、いません……」

「……もしかしたら助かるかもしれないなあ」

きっと、僕を落ち着けるためにあんなことを言ってくれたのだろう。もてなくて良かつた、とはさすがに思えない自分が悲しい。

「さ、そろそろ行こうか？」

「うん、そだね」

焰華ちゃんも元気そうな僕を見て安心したのかそういうて鞄を持つた。僕も同じようにして鞄を持つ。

「……あ、そういうえばね……」

「ん？」

急に立ち止まつた焰華ちゃんに危うくぶつかりそうになりながら止まるところへ向かずに焰華ちゃんは言つたのだった。

「……昨日の夜さ、時雨君が私の夢に出てきたんだ~」

「…?」

危うく鞄を落としそうになつたのだがすんでのところで落とさずにすんだ。

「そしてね、やぶつながらって……こつたんだ

「!?

今度は駄目だつた。鞄は見事に地面に落ちた……あれ?それより……僕……既に焰華ちゃんの夢に登場してルールに載つてた最悪な……そう、行方不明になる最終段階踏んでるんじゃない?けど、実際はここにいるし……死んでないし……

「大丈夫?鞄、落ちたよ?」

「え?う、うん……大丈夫」

鞄を拾つてくれた焰華ちゃんにそういうも、心の中は恐怖でいっぱいだつた。しかし、何故……といつ気持ちがないわけでもない。

「あのさ、焰華ちゃん……」「?

僕は不思議そうな顔をしている焰華ちゃんにお父さんのことを聞こうとしていたのだが……やめた。自分が助かるために他人を陥れるほどまだ僕の状況は切羽詰まつてゐるわけではないし、あんまりあつたことがない僕をまるで兄のように慕つてくれている彼女の心の傷を再び開けるようなまねはしたくなかった。

「……早く行こつか?遅れちゃいそうだし……」

「うん?勿論だよ」

一瞬、不思議そうな顔をしたのだが彼女は頷いて玄関を開けた……

「…?」

そこにいたのは額に一つ穴の開いた狐面を被つた女子生徒が立っていた。

「おはよ、天道時君、焰華ちゃん」

狐面をとつて出てきたのは霜崎さんだつた。

「あ、ああ……おはよつ、霜崎さん」

「おはよつ、亜美先輩」

僕らが挨拶をすると霜崎さんの後ろから剣治が現れた。

「おはよつ、お一人さん」

「うん、おはよつ剣治」

「剣治先輩、相変わらずですね……」

何故か呆れたように咳こいて焰華ちゃんは歩き出し、それをスター

ト合図として僕らも歩き出した……まだ、夜は青空に輝いている。

「…………鬼女は亜美わ」

「！？」

剣治の声がいきなり聞こえてきたような気がした。だが、剣治は焰華ちゃんと話している。

「どうしたの、天道時君？」

「え？ いや…………」

僕はせつときの言葉について考えるのをやめた。不毛だつて、今頃
考えたつてや。

第五話 おや、田々なつひにかわりゆくものなんだよ

第五話

あれから一ヶ月、さうに何事もなく……といつわけにもいかず、残念なことに日々シユールな光景が僕を襲っていた。

家に帰れば部屋の中に意味不明な生命体がまるで迷子みたいにありをきよろきよろしていたり、電柱の陰からなんか出てきて連れ去られそうになつたり、持っていた赤色のとあるプラモの自慢の角が消えていたりと……それはもう、戦々恐々といった日々を送っていたのである。田に田に田は落ち窪んでいき、それはもうまるで死人のような顔となつてしまつていて……といふこともなく若干顔色が悪くなるぐらいだった。あれ? とても纖細な性格だつておもつていたんだけど意外と僕つて図太いかもしれない。

そして、今は夕食が終わつた後のまつたりとした時間。僕と焰華ちゃん以外は家族の人たち全部が公民館に集まつてゐたりする。

「ねえ、時雨君顔色が悪いようだけど?」

「ん~最近まともに寝れないからね……眠りが浅いつて言つつか……」

焰華ちゃんが心配そうにそなことを言つてきているが漸増さんとの約束で彼女には『鬼渡し』につこてのことを一切喋つていないので。

焰華ちゃんが入れてくれた紅茶をすすりながらあんまり働かない頭で必死になつて言い訳を考える。

「ちよつと考え事があつてそれでちよつと疲れてるつて言つか……」

「……」

「そうなの?」

「うん、そうなの」

「それなら……いいものがあるよ」

「にこりと笑つた焰華ちゃんの笑顔に嘘をついた僕……いやいや、

嘘はついてないよ、うん。今、僕は切に命が削られていいってあります
といいかけたがそんなこといつちやつたら元も子もないのでも
黙つていると焰華ちゃんはポケットをがさーんと音を立てて何かを
取り出した。

「てつてれてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
睡眠薬う～」

「何故そんなものをー?」

「な・い・しょ これ飲めばぐつすり眠れるよ」

「……いや、遠慮しとくよ」

紅茶をさつさと飲み干すと、彼女がにやりと笑う。その笑顔に何か薄ら寒いものを感じ、僕は急いで寝たほうがよきやうだとおもいつあたつた。

「勿論、時雨君が拒否するってわかつてたから既にその紅茶の中に入れておきました 時雨君、私が殺人者だったらとくに死んでるよ」

既に手遅れ判明……強行するとこりは僕たちの家系なのね……。

「な、何だつて!?

思えば段々と眠くなつてきたような……慌てて立ち上がるが足元はふらふらでどうやら焰華ちゃんによつかかつているよつたな状態だつた。

「ほら、あとは私に任せとおやすみ……」

「そ、ん……な……」

ばたり……という僕が倒れた音が聞こえてきて、目の前に映るのは焰華ちゃんの一本のあんよだつた……す、すべすべしてそつがくり……。

剣豪が一人、僕の目の前を歩いていく。顔には鬼面をつけており、腰には禍々しい何かを発する日本刀がつけられていた。

「?」

首をかしげていると今度は狐のお面を被つた一人の少女が歩いて

いく…………しかも、どこかで見たことがあるような場所だった。こちらは手に能で使われるような

「！」

声を出すことが出来ないことに気がついて僕は驚いたのだが、目の前を通りていった二人組みは僕に気がついていないようだつた。彼らがやつてきた場所…………それは学校の屋上だつた。二人して向かい合い、手にする獲物で相手の隙を狙い続ける…………。

「？」

しかし、そうおもつていたのは僕と狐面をつけた人のみだつた。鬼面をつけた侍は日本刀から手を離してただ、立ち尽くしただけだつた。ほかに何かするというわけでもなく、空を眺めるようなそんな感じだつた。

狐面の人も動かない。きっと、相手が何かしようとしているとおもつてゐるのだろう…………もしかして…………手品とか？刀を抜いたらお花がポン…………いや、お鼻がポンのほうが観客が踊るかもしけないな…………。

僕が馬鹿な予想をしていふとどうその侍は刀も抜かずに再び僕の目の前を通りていき…………手品などをする事もなく僕の目の前を通過。

「…………今度で最後だ、君が最後をつとめて欲しい…………」

「！？」

そのように僕に言い残して去つていつたのだつた。狐面をつけた人はただ、その消えてしまつた鬼面侍をぼーっと見ていただけだつた。そして、僕もその後姿が扉で見えなくなるまでずっと見続けていたのだつた。

「…………」

「結局のところ、これまで鬼面をつけた人たちは実のところ真相までたどり着いたんだよ、時雨君」

今、自分の部屋で眠つてゐるところに僕はようやく気がついた

た。

「…………剣治？」

「やあ、君が寝ているって聞いてお見舞いにやつてきたのさ。亜美も一緒にいるよ」

「ども~」

僕の所持している漫|画本をじーっと見ながらあへへ……と珍しい笑い方をしている。霜崎さんがニヤニヤしているところを見ると非常に普段とのギャップがすごすぎてなんだか恐いな。

「これから先の話は僕と亜美だけの二人の話さ…………焰華ちゃんに一服盛られた哀れというか、おばかな天道時時雨君はまだまだ夢の中…………そうだろ、亜美？」

「もつちろん…………けどまさかあの子が天道時君に対して薬を盛るなんて考えられないって…………わけでもないかあ。それほど顔色が悪かつたんだろうね…………それに、もとはといえば、焰華ちゃんが悪かつたりするんだけど…………」

霜崎さんは首をすくめながらも視線は漫|画のほうだつたりする。あれ? この一人はお見舞いに来てくれたんじゃないのだろうか?

「ま、あの状況じゃまやかしでも見ていづれ狐面の鬼女に殺されたいだらうね」

「…………」

「そうだね、狐面の鬼女つて呼ばれている存在は見えない鬼を一生懸命追つてるからね」

にやりと笑う霜崎さんの微笑というか…………そんな笑みがこれほど恐く感じたことはなかつた。

剣治は別になんとも無いように独り言のよつに口を開き、静かな部屋にこだまするような聲音でしゃべる。

「…………ま、これまで鬼面が引つ付いた人の中には確かに間違つて人を切つちゃつた人もいるけど結局は最後のほうまで…………亜美がしゃべつちゃつたところまでやつたんだけどねえ」

剣治がちらりと霜崎さんのほうを見てしゃべる。見られたほうの

霜崎さんは苦々しそうな笑顔を作つて冷や汗だらだらにしながらしゃべつた。

「だ、大丈夫だつて！まだ山の神様も起きてないし、これからどうにかすればいいんだからさ！今年こそ最後にしないと…」

決意を新たにしたという表情を剣治に向け、僕に親指を立ててくれる。大丈夫だ、心配はないといわんばかりだが若干不安でしょうがない。大体、何をしようというのだろうか、この一人は……

「さ、そろそろ僕らは帰るところ」

結局、何をしに来たのかさっぱりわからなかつたな。

「そうだね、天道時君は眠つていいようだし……」

いや、はつきりとした意識はあるのだが未だに僕に対してはしゃべらせてくれないようだ。

剣治は立ち上がり、それにつられてかのよつにして霜崎さんも立ち上がつた。

「最後に……伝言。身の回りに何か変わつたことが起こつたらこの家の南側にある丘に来て欲しいんだ。勿論、時間なんて関係ないよ、何か変わつたことが起こつたらすぐに言つてほしい……おつと、眠つていてるからいつても無駄かな？」

無駄以前に既に身の回りには変わつたことが起こつてゐる。従妹は薬を盛るわ、なにやら意味深な夢を見るわ、意味不明な二人組みが僕の部屋にやつてくるわ……充分変わつた出来事に違ひないだろう。これ以外に何か起つるのだろうか？今すぐその丘に行つたほうがいいかもしれない。もつとも、行つたところでいいことはあまりなさそうだが……。

「じゃ、失礼しました」

「ばいばい、時雨君」

一人とも扉から出づに窓を開けて……あれ？それ以前に僕の部屋に窓は無い。

「…………何者なんだ、あの一人？」

気がつけば窓など僕の部屋には無く、普通にそこにあつたのは壁

だつた。しかしまあ、こまさら鬼に取り付かれている僕から見ても、これは非常におかしな出来事だつた。

しかし、剣治がいつていたであらう『何か変わつたこと』というものはその夜、早速起きたのだった。

「ん？」

あれからそのまま眠りに入り、気がつけば深夜十一時を過ぎていた。この家の人たちは基本的に十一時には眠つており、静かだったのである。聞こえてくるのは無、しいて言つたら闇の風の音だろうか？

畠の前に広がる闇に畠を凝らしてみると……僕の机の下に何かがいる。それは僕に気がついていないのか体操座りをして虚空を見つめており、僕の布団の隣には……

「……ひつー？」

角を生やした俗に言つ鬼という存在が金棒を脇に置いてこれまた虚空を見つめていたりもする。僕の部屋へと通じるふすまが開き、これまた別の鬼が姿を現して足を引きずるよつにして歩いてくると他の鬼が座つていないとこに座り、虚空を見やる。

「！？」

気がつけばいたるところに鬼はおり、動かない。だが、逃げようと見えよつにもこんなに鬼がいてどこに逃げることが出来るのだろうか……僕がほとほと困つていると声が聞こえてくる。

『……陰の中に我が愛用していた“土蜘蛛”が眠つてある』

この暗闇よりも暗い部分、それが僕の陰だつた。そこに手を触れてみるとなんと、陰を通り越して僕の腕が消え……陰の中で何かを掴んだ。

「…………これは……」

『…………これは“土蜘蛛”。その昔我とともに日々を過ごしてきた我のすべて』

僕が握っていたのはぼろぼろの鞘に入れられた日本刀。何かとも禍々しいオーラのようなものが見えているような気がしないでもないが、今はそんなことをいっている場合ではないだろう。

「うつ……」

しかも気がつけば鬼たちは皆僕のことを見ていた。露骨に涎なんかをたらしている奴は確実に僕を食いつもりだろう。

「く、喰われてたまるかよ！」

僕は刀を抜くとそのギラリと光る冷たい刃を無我夢中で振り回し、相手の一瞬の隙をついてこの期に及んでふすまを蹴り飛ばすことなく、普通に開けて廊下に出て一田散に玄関へと向かつていつたのであつた。

廊下の途中、人の気配が感じられたので刀をなおし、隠れるが、誰もやつてこない。気配だけは一応目の前を通り過ぎていきた。僕は背筋がぞくぞくとなるものを感じた。

「やつぱ、急いで行つたほうがいいよね？」

誰に言つでもなく、僕は霜崎剣治＆亜美がいつていた場所に今すぐにも行きたいと切に願わざる終えなかつたのだった。

第七話 あれ？日が昇つてきたようだね

第七話

僕の声が響き渡る…………そして、その後に霜崎さんの声が返つてくる。窓の外に昇つている月はいつの間にか消えていたのだが朝日が昇つてこようとしているのかうすらと光が地平線のかなたに確認することが出来た。

「…………え？漸増さんも鬼面をつけたって？」

僕の声が響き渡り、まだ僕ら以外誰もいない校舎に一瞬の喧騒を生み出す。

「うん、霜崎家じゃ有名な話…………唯一戻つてこれた人だつて聞いてるよ？漸増さん自身も物凄い剣の実力者だし、鬼面をつけることによつて人とは違つた動きも体得できるつて聞いているからね。だから自分の力で鬼面をどうにかしたんだろうって噂…………けどさ、木曽家じゃ知られてないみたいなんだ。私たちの方だつてそのことについては詳しく知らないし、知つていることはさつきも言つた通りで漸増さんが鬼面をつけてこの学校に入り、戻つてきたつて言つだけ…………」

だけど、僕の記憶では漸増さんは鬼面をつけたことが無いつて言つていたつけな？うーん、結構なお年みたいだつたし、そろそろ物忘れしはじめたんじゃなかろうか？そのことを伝えたのだが霜崎さんは首を横に振つた。

「ぜ～んぜん、あのおじいさんは殺しても死なないつて有名な上に何でもかんでもこなせるよ？姿勢も正しいし、記憶力だつて私らより上なんじゃない？」

まったくもつてこの鬼面よりもミステリアスな人がまさか同じ屋根の下に住んでいるとは思つてもいなかつた…………それなら何故、僕を助けてはくれないのだろうか？うーん、もしかしたら嫌われているのかもしれないなあ…………

「……一体、どうこうことなんだろう？あれ？」

霜崎さんは狐面を再びつけていた。

そして、気がつけばそこはすっと同じ廊下が続く一つの道……奥を見渡すにもすっと同じ光景が続いているだけで廊下、トイレ、他の教室などなど……そんなものはどこにもなく、外に見えるのは永遠と続く校庭のちょうど半分の向こう側からこちらに来ようとしているのだが一向に来ることができないジレンマしている鬼たちだった。

『さてと……もつもつとその話について色々と聞いておきたかったんだけど……私たちの出番がやつてきたみたい』

「え？」

呟いた僕の耳に聞こえてくるのは風の音……いや、悲鳴の音だつた。とてももの悲しく、心が悲しみで満ちてこくのが手に取るようになるといふ不思議な音だつた。

「だ、誰か……この奥にいるの？」

『いや……違うよ、これは声なんかじゃない……校内から吹き出る風だよ、風。この高校には七不思議がいくつかあってね、これも昨日剣治から教えてもらつたんだけど……』

話を聞こうとして霜崎さんに若干近づいたのだが……

「ん？……つて……うおうー？」

何ががす「いスピードで転がってきたとおもつて飛び上がる。やして、止まつたそれを見るとそれはなんと！

「ず、頭蓋骨！？」

『そう、頭蓋骨が……転がつてくるんだつて、剣治がいなかつたら私たちも今頃こうなつていたかもね……ああ、それが鬼面保持者だった人たちかどうかはわからないよ。私、確かに恐い話は好きだけど噂になつていてる場所とかにいつたりしてそれを実際にやってみようとおもうほど勇気はないからね』

「ほ、僕もそうだよ」

『警察に教えようにも信用してくれないし……下手にその頭蓋骨

を外に持ち出したりしたら彼らがどうにかなっちゃうよ』

それはまったくもつて洒落にならない。……のだが、すでに『どうとかなつてゐるであろうこの状況はカウントされないのでどうか?まあ……僕はまだまだ若いのだ、こんなところでくたばるわけにはいかない……そのためにもするべき」とはただ一つ……

「僕はどうすればいい?」

『そうだね……ともにこの奥に行つて神様を起^さす」とだけじゃない?』

震える両足を叱咤して僕と霜崎さんはともに床を蹴つて疾駆し始めたのだった。

一キロは走つただろうか……だが、見えてくる景色は先ほどとまつたく一緒のもの。

「うーん、気が狂いそうだね」

『ま、そんな仕掛けもあるつて剣治は言つてたつけなあ?この校舎を一回剣治と一緒に下見に来たとき私、結構いい名前をおもいついたんだ』

のんきにもそんなことをいいながら、ついでに狐面を見せる霜崎さん。まったく緊張感が無いにも程がある。

「どんな名前?」

しかし、走ることしか今の僕らには選択肢がないのでそれを聞いて見ることにした……今、隣の壁に貼り付けられている虫歯予防と痴漢予防のポスターを見るのは何百回目だろうか?

『その名も無限回廊

』

第八話 あれ？時間つてこんなにむろいもの？

第八話

携帯電話から声が返ってきた。

『やあ、時雨君じゃないか……どうしたんだい？おじいさんがいなくなつてまさか行方不明にでもなつたんじゃないかつておもつたのかい？』

剣治はそんな適当なことを言つてゐるようだつたが、それでもまだ本心は見せてくれていないようだ。それはまるで明日の天氣について知らせてお天氣お姉さんみたいな感じだつた。とても軽いノリなのだ。

「いや……違うよ」

僕は慌てていたのでそんな冗談にかまつていられなかつた。僕が言おうとしていたことなど剣治は知つてゐたようで、次の瞬間には軽いノリなどどこかに吹き飛んでしまつたようなシリアルス全開の声が返つてくる。

『大丈夫さ……君ら一人の事をあの人……いや、漸増さんが無視するはずがないよ、あの漸増さんは……きっと一人のことを待つているつて僕はかけたつていい……そうだね、はずれたら僕の大切なフィギュアをプレゼントしよう』

僕は剣治の言つた最後の言葉は無視して前のことについてたずねてみる。

「まつてゐるつて……どういうこと？」

学校へと急いで向かつてゐる僕の隣に電柱の上から霜崎さんが現れる。まだ狐面はつけていないようだつたが姿は既にあの巫女服のようなものだつた。

「天道時君、あの無限回廊に……何か気配がしてゐる

「え？それつて一体……どういうことなんだろ？」

『おやおや、既に畠中までそっちに言つていたとは……お一人さ

ん、どうやら今日はデーターの「」予約が入っていたようで……先生には仲良く風邪をひきましたって伝えておくよ。ああ、その中に漸増さんが入るだらうからデーターじゃないかな?』

最後に後のこととは任せて欲しいと剣治は言ったのだった。

「うん! よろしく! 』

剣治に学校のことは任せ僕らは並走し、段々と大きくなってきている学校へと視線を移した。周りの人たちは数人いるのだが、まるで僕らのことには気がついていないようだつた。

校内へと入る扉を開け、僕らは転がるようにして中に入る。霜崎さんが指をぱちんと鳴らすとそこにはもう、永遠と続く廊下……無限回廊へと変わっていた。

「…………ここから先にはいかんせんぞ」

「漸増さん! 』

「やつぱりか…………」

ただ、昨日と違うのは廊下の真ん中に漸増さんが姿勢正しく右手には日本刀を持ってたつているということだけだつた。影を落としたような感じでこれまで一緒に生活してきたおじいさん…………という雰囲気などどこにもなかつた。あるのは殺伐としたつめたい空気だけ。

「やはりとか…………霜崎家のものが手助けをしておつたとはな」霜崎さんを一睨みし、今度は僕へと視線を向ける。その目には優しそうな瞳をしていた漸増さんの瞳などどこにも無かつた…………いや、もしかしたらこちらのほうが事実なのか?

「あれだけ偽の情報を『え、自分が鬼であるという虚実さえも認めさせたのに…………どうやらわしの配慮が足りなかつたようじやな」

「ちゃんと天道時君の友人関係を調べておいたほうが良かつたんじやない? 漸増さん? 』

僕が何か答える前に彼女はあつさりと返答した。その瞳には余裕のためかどうかわからないが微笑がたたえられている。

「小娘が…………いいよるわい。やはり木曾家に相対する霜崎家の血

をその身に受け継ぐものじゃ…………」

「漸増さん、何故、僕らの行方を阻もつとするんですか？」

不思議に思つてそれを口にするのだが、漸増さんは霜崎さんのほうを見るだけだった。

「ほう、霜崎家の連中には教えられていなかつたのか…………」

「…………そりやまあ、木曾家、霜崎家にとつては聞いておくべき話だろうけど天道時君が知つたところでどうするの？大体、あれつてもう無効だつていつたのはそつちでしょうに」「元づ

漸増さんは一つ笑つてからよつやく僕のほうを見た。

「確かに…………そうじやつたな。じきじきにわしからいにいつたことじやつたわい。いかんのう、年をとると。…………行方不明者が出るたびに木曾家と霜崎家は莫大な富を得る…………と言つても、何も神様から施しを受けるというわけではない。運がつくよつになり、富豪になるなど軽いこと…………わしはその欲に狩られし鬼じゃ…………」

「！？」

漸増さんの顔にひびが入り、その額からは一本の角が伸び始める

「…………だからわしは反対したのじゃ…………よもや、ここまで我家の欲を、わしの欲を潰そうとしようとしているやからを家に置くなどと…………ここで切り捨ててくれよつ」

漸増さんは抜き身の刀をこちらへと向ける

「や～れやれ、まさか人が鬼になるなんて…………はじめてみたよ」霜崎さんは懐から狐面を取り出してそれをつける。僕も陰の中から漸増さんが持つてているのにそつくりな刀を取り出して構えた……説得するには相手は人の話を聞かない、相手の言つていることを認めるには僕にとつて無理な話だつた。

「さて、鬼にどれほど通用するか…………この技、試してみよつかな

？」「…………」

僕ら二人は目の前の漸増さんと相対する。これから二人を相手に

するのにとても余裕の表情を見せている。

霜崎さんは懐から何かの紙を取り出すとそれを漸増さんへと投げつけ……その紙は嵐を廊下に巻き起こした。

「つるさい風の音で耳が無力になつてはいたが、すぐ隣にいた霜崎さんの言葉はしつかりと聞き取れた。

『…………あのさ、天道時君……早い話私ら一人じゃあの鬼は倒せないと思つ』

「え？」

驚いて隣の霜崎さんを見るが、狐面の上からでもわかるが、きっと不安そうな表情をしているに違いない。

「えつと……じゃ、どうすれば？」

『……いつてなかつたけどもう神様が眠る場所まで半分以上来てるわ。えつと、具体的にいうなら四分の三ぐらし』

嵐は徐々に小さくなつてきていて、どうやらこの話を聞かれないように霜崎さんは嵐を起こしたようだつた……ナチュラルに人間技とは程遠いね……いまさらだけど僕の周りの人つて変わつた人が多い気がするよ。

『私が囮になるか、天道時君が囮になるか……どつちにしろ』こので漸増さんの相手をどちらかがしている間にもう一人が神様をおこすの。そうすれば“神の領域”と呼ばれる力が発動されてあの鬼を

『……』

嵐は今では完全におさまつており、漸増さんが駿歩で五メートルはあつたであろう間合いを踏破してきた。そして、その刀は霜崎さんへと降り注ぐ。慌てた僕は彼女と漸増さんの間に割つてはいる。

「くつそーー！」

振り落とされた日本刀に“土蜘蛛”をぶつけた。

「それなら、霜崎さんがいつて！」

『わかつた』

至近距離でにらみ合う僕らを一度と振り返ることなく霜崎さんは去つていった。振り返ってくれなくて悲しかつたが、今はそんなこ

とを言つてゐる場合ではない。

「ほほり、このわしの相手をしてくれるのは木曾家の裏切り者か……」

「裏切るも何も、僕は天道時つていう苗字がある……」

漸増さんは僕から離れるとその右腕を光らせる。

「！？」

必殺技でもあるのだろうか……霜崎さんがやつたみたいに……

そんな感じで危機感を抱きながら僕は僕が握る刀に力をこめる。

「素人が達人に勝てると思ってか？」

「いや……それは出来ないってわかってる」

「ふふん、そうだろうな……」

当然の結果だといわんばかりに漸増さんは頷いたが……次に鼻を鳴らして不機嫌そうに僕に告げる。

「だが、今のお前とわしはほぼ対等。この鬼面をつけている間両者の間での実力は一緒なのだ……」

自らの刀を左手でさわり、今度は僕を見る。

「この刀の刃は自分の心で出来ておる

「心？」

「そうじや、心……といつても、使えば使うほど磨耗し、いざれはその所有者もろとも消滅してしまうという代物じや」

それじゃ妖刀じやねえか！？ そうぼやきそうになつたのだが黙つて相手の出方を見る。もしかしたら相手が僕の隙を狙つている可能性も無いわけではないのだ。だが、相手はもう僕の相手をする気にならないのか刀を鞘におさめる。

「ふふふ、あの狐面の巫女を追いかけなくていいのか？ 神を起こせば確かにわしも終わりだが…… その昔山にいた神は寝起きが悪く近くにいた者たちを一掃したらしい…… わかるか？ この無限回廊はそのためにあるのだ」

「…………」

つまり、霜崎さんがいう『神の領域』というものが発動すれば確

かに鬼となつた漸増さんを倒すことは出来るのだがついでに霜崎さんも消滅する可能性があるつてことか……

「さあ、どうする? わしは何もせずにこの道を譲つてやるわ」

「そういう廊下の脇へと移動する漸増さん。」

「くつ……」

僕は目の前の漸増さんをもう見ることなく全速力で霜崎さんの元へと向かつた。

「せいぜい犬死しないようにがんばるがいい……」

はつきりいってあの鬼を外に逃がせば……そのまま木曾家はずつと悲劇を繰り返すに違いないだろ? 「……多分、漸増さんが何をしたかったのか、それさえわからないが……今するべき」とは一つ! とりあえず霜崎さんを止めることだ。

「やはり、青いの? ……」

「いまや軽々として脱出を図り始めていた鬼は一人ほくそ笑んでいた。」

「じゃがまさか……あそこまでの実力を備えていたとは……奴にはこの鬼面の法則が通用していなかつた……今摘まねばいつかは摘まれるかもしけんが今は逃げの一手じや……」

そんな鬼の目の前に一人の人間が待つたをかけた。

「おつと、そうそう逃げ帰らなくともいいんじやない? 嘘をついてまで帰らなくとも……ね」

「おぬしは……たかだか人間の子どものくせしてわしの前に立ちはだかるとはいひ度胸じや、ここで切り捨ててくれよ!」

刀を手にしたはずの鬼だつたが、その手に刀は無かつた。

「お?」

正確には、右腕そのものがなかつた。

「きちんと手はにぎつておかないと……ほり、右腕おつことしちやつたでしょ?」

「く……」

「ほらほら、いつの間にか体が…………」

無限回廊入り口に確かに一人の人影があつたが…………今では完全に一人の影しか見受けられなかつた。

「やれやれ、年をとつても強いつて噂の鬼だつたと思つたんだけど……ま、そんなことはどうでもいいか…………あとは君たち一人にまかせるよ亜美、時雨君」

無限回廊と名づけられた場所に背を向け、彼は指を鳴らした。そして彼は姿をくらまして…………後に残つたのは血なまぐさい風だけだつたのである。

無限回廊の果て、僕はようやく霜崎さんを見つけた。そこは一つの教室のような場所で中央には光り輝くお札が貼られており、祠まで置いてあつた。後一步のところで…………といつとこころで霜崎さんは祠のお札を引き裂き、祠の扉を開けた…………

「だ、駄目だ！ 霜崎さんっ！！！」

ただ、僕の声だけがむなしく響いたのだった。

第九話 ふふ、無力だね（前書き）

次回、所用で飛ばしていた話を載せます。

第九話 ふふ、無力だね

第九話

僕は霜崎さんを気がつけば突き飛ばしていた。

「きやつ……！」

「はあ……はあ……ぐばつ……」

そして、さらに僕は右のほう……祠があいてあるほうからの強い衝撃によってそのまま吹き飛ばされ、壁に思い切り衝突。物理的なダメージよりも何か精神的につらい一撃を食らつたような気がした。

「うひ……」

ふらふらになりながらも立ち上がるつとして……壁に寄りかかつたはずの僕の手がそのまま壁を貫通。気がつけば僕は廊下に立つていた。

「あ、あれ？」

慌てて部屋に扉から戻ると……そこにはもう一人、僕がいた。まばゆいばかりのオーラのようなものを纏つている。存在するだけで僕ら一人はたつことさえ許してもらえない……そんな威圧感も彼には存在していた。

「て、天道時君が……一人！？」

膝をつきながらも田の前の相手を確認する霜崎さん……僕にいたっては地面に顔面をのめりこませているよつたな状況だった。

「…………」

いや、よくよく見てみれば田の前のぼくは田つきが鋭い上に……

自分で言うのもなんだが、かつこよかつた。

「ふう、久々の復活……これはよい体を入れた……おい、狐よ……これでいく数十年間縛り続けていたおぬしの呪縛を解き放つてやるう……」

田の前の僕は指をぱちんと鳴らし、それに呼応するかのように霜

崎さんが持っていた狐面は狐となつて空へと昇つていった。

それを確認すると今度はこちらを見て……

「さあ、狐を追つて消えるが良い」

「え？」

僕の顔から何かが昇天し……僕はなんとか膝をついた。圧倒的な存在感、いるだけで周りのものを押さえつけ、絶対的な力を誇示する存在……直感的に感じたが、これが人と神の超えることは出来ない壁だとでもいうのだろうか？

「ふむ、これまでの茶番をよしやく終えたか……これから先、二人とも我につかえるが良い……と言つても、そこの娘だけで充分だ。お前にはもう、半分ほどとはい、このすばらしい体を貰つたからな……さらばだ」

目の前の僕が行つたことといえば霜崎さんの手を掴むと彼女が何かを言う前に僕の前から姿を消したのだった……後に残されたのは普通の教室と、なんだかゆれ始めているという事実だけだった。既に体に入り、自由に体を動かすことが出来ていた。

「と、とりあえず逃げないと……」

僕は慌ててその場から逃げた。後ろのほうではあの教室から崩壊が始まっているのか、祠が崩れるような音が聞こえてきたのだった……消えてしまつた霜崎さんのことと思いながら……

無限回廊が完全に壊れると同時に僕は校門の前に立つていた。昨日と同じようにこの場所にワープしてきたのだった。

「…………いないか、やつぱり」

てつくり校門前にもしかしたら霜崎さんがいるのだろうと思つていたのだが……それは間違いだつたようだ。

「やあ、時雨君じゃないか……奇遇だね？」

声のしたほうを振り返るとそこには……

「剣治……何してるの？」

何故か剣治が頭からアスファルトの道にめり込んでいたのだった。

頭の部分が完璧にめり込んでいたのに何故か、声だけは聞こえてくる。

「見ての通り山の神様に挑戦したんだけど……まさか、時雨君の顔で来るとは思いもしなかったなあ……見事にやられてしまった、うんうん」

めり込んだままで胡坐をかき、体を上トにせざることでどうやら頷いているようだった。見ていろとなんだか気持ちが悪くなつてくる気がしてくる。

何とか気持ち悪さをこらえて田の前の剣治に僕は尋ねる。無論、たずねることはあることだけだ……

「……じゃ、じゃあ霜崎さんとも会つたの？」

「それは……」

黙りこむ剣治に僕は続ける。

「どうなの！？あつたの？霜崎さんに会つたの？」

両足を掴み前後に揺さぶる。きりきりといつ音が聞こえてきたような気がしたのだがそんなことはかまわなかつた。

「いいかい、時雨君……彼女はとっくに狐面の使い手になる前から神様に使えるつて決めていたんだ。君が亜美を助けようとする気持ちはずばらしい友人愛だといつていいだろ？……だが、それは亜美が決めたことを君が潰そうとしているということでもあるんだ」

「……」

「それに、今はその体をどうにかするのが先決だと僕は思うね」

「……そういえば……」

改めて体を見ると若干透けていた。剣治は自力でアスファルトから頭を引っ抜くと僕に触りつとした……が、剣治の体は僕を突き抜けていった。

「ほら、これじゃ色々と不便だろ？亜美のことは忘れるんだ……

……といいたいけど、君の心の中だけでも絶対に亜美のことだけは忘れないで欲しい」

その瞳は強く、まっすぐしたものだった。何か意見することなど

出来ない。

「…………霜崎家の家系には既に亞美という女の子の子の存在はなくなっている…………戸籍にも存在していないからね。だからさ、君が覚えてくれていらない限り、彼女がこの世にいたっていう証明はないからさよろしく頼むよ」

剣治は僕に頭を下げた。

「…………勿論だよ」

「それはよかつた…………あのさ、また明日…………僕の家に来てくれないか？」

剣治は僕にそう告げる。

「え？ まあ…………いいけどわ」

「そうかい、それは良かつた…………木曽家では君を探しているやうだよ。すぐに帰つたほうがいい」

剣治の周りにいきなり風が吹き始める…………

「ああ、そうだ…………また何か僕の力が必要になつたときは名前でも呼んでくれよ。そうしたらまたいつか会えるだろ？ から…………」

「え？」

気がつけば剣治は消えており、残されたのは僕ひとりだけとなつた。胸に去来すものは静かな虚空の塊だつた。

「…………霜崎さん…………」

僕がするべきことなど、何一つ無かつたのかもしれない。助けに行つたのに、助けることが出来なかつた…………そう、例え神に仕えること…………それが彼女が望んでいたことだつたとしても…………前に霜崎さんから聞いたことはとても名誉なことらしい。そりやそうだ、神様に仕えるのだから…………だけど、納得がいかない僕は…………

「とりあえず…………戻つたほうがいいかな」

今学校に行つても勉強なんて頭にはいることはないだろ？ そんなことを考える余裕などなかつた僕はいわれたとおり木曽家に向かつて歩き出していた。

「！」「これはどうしたことですか！？」

気がつけば僕は僕をいつか抑えていたおばあさんたちに捕まっていた。僕の周りには四角い壁が出来ており、何故かそれを貫くことは出来ない。

「…………神の始末じや」

「か、神つて…………」

僕の眩きに反応したのかなにやら呪文を口にしていた一人の老婆が…………この老婆は僕が質問をしたときに答えてくれた人だつた。「神を見たものをこの木曽家に入れることが出来ん決まりでなあ……お主が向かうのはほれ、そこじや」「…………」

先にあるのは禍々しい池だつた。

「…………」

「せりばじや…………なあに、おぬしはこの木曽家に巢食う鬼を退治してくれたという実績があるからのつ…………手荒な真似はせんから…………だが、同じようにしてこの木曽家に破滅をもたらすかもしれん…………」

手荒な真似はせんといながら…………池に落とそうとしているじゃないか！？という言葉はのどまでかかつたのだが相手はどうせ聞く耳を持つていないので、そのまま僕を池の中には落とそうとする。

「ちょ、ちょつと何してるのー？」

「ほ、焰華ちゃん…………」

驚愕のまなざしで「」を見ているのは焰華ちゃんだつた。早退してきたのだろうか？その肩には学生鞄がかけられている。

「ふむ…………焰華か…………何しに来た？邪魔をするなら一緒にいれてしまつや」

「そこいつて悪い人を閉じ込めるつて場所じゃない！時雨君が何をしたつていつのー？」

しかし、焰華ちゃんの言葉に耳を傾けよつとはしなかつた。かすかに見えた希望は絶望へと変わつていいく。

「ほれ、進まんか…………」

四角い箱は僕を包んだまま…………そのまま池に入れようとしていた。

「駄目だつたらー…」

「こ、こら焰華！？」

焰華ちゃんは僕を包んでいる四角い箱に飛び移った…………こんなときにも思つのがめちゃくちゃ行動派なんだね…………そんなことをやはり言つている場合ではなかつた。あせつたのは何もあのばあさんたちだけではない。

「焰華ちゃん！ いけない、離れるんだ！」

このままではまずい………… 霜崎さんに続いて焰華ちゃんまでようくわからんことになつてしまつ…………

「つて、うわあああああ

「きやあああああ

だけど………… だけど気持ちだけでは何もすることが出来ず………… 僕は透けた白い体のまま、そして焰華ちゃんはダイレクトに禍々しい池の中へと墮ちていつたのだった。

墮ちていく黒い池の中…………

無力を知つた僕は力を望んだ…………

たとえ、そう、僕が何も出来ず、このまま落ちつてしま…………

霜崎さんのときみたいに何もせずに誰かが僕の田の前から去られるなんて…………

それだけは絶対に許せなかつた…………

だから、力が欲しかつた…………

対抗できる力……

望んだ僕に今できることは……

けど、何一つしかなかつた……

ただ、僕はいつもして墮ちていぐだけの存在だった……

第四話 わて、人はどこまで進めるんだらうね？

第四話

「時雨君、何か僕に聞きたいことってないかい？」

あれからもう一週間がたつていた。何をすると言つわけでもなく、いつものように僕は生活していた。今日、珍しく剣治が放課後に僕を屋上へと誘つたので僕はおとなしくついていくことにした。その真意は謎だが、どうせ剣治のことだからどうでもいいことなのだろうと思つていたのだが、そうではないと僕の中の何かが警告をしている。

「…………劍治はずつとここに住んでたんだよね？」

「まあ、生まれたときからこの町から出てないってわけじゃないけど毎年の殆どはここで生活してるね…………この町には面白い話があつてねえ…………聞く人によって内容が変わるんだ。狐と鬼のお話をしてあげようか？」

「…………うん、教えて欲しい」

「じゃ、しゃべりますかね」と剣治は咳く。

「ああ、はじめに言つておくけどあくまでこれは僕が知つてている話だからね。信じる、信じないは君の勝手だ。無論、さつきも言ったけどこの話は話す人によつて内容が変わる…………その昔、この村には狐が住み着いててね、これがまた、変わった狐なんだ。その狐はある日、山の中に入ってきた女性を驚かして遊んでいた。だが、その日は雨が降つた次の日だったから女性はあやまつてがけ下に落ちて死んじやつたんだよ」

「…………それで、どうなつたの？」

「さすがの狐も罪悪感を覚えたのかな？このままではまずいってこと…………山の神様にどうにかして生き返らせて欲しいって言つたんだそうだ。山の神様は別に人間とかには興味がなかつたんだけどちよつとこのまえ狐に祠を壊されて頭にきていてある条件を出した

んだ

「……ある条件？」

剣治はどこからか狐面をとりだすと僕に投げつける……いいのだろうか、結構年代物でさらにはわくがついているような代物のような気がするんだけど……。

「代々その家と村を守り、面となつてその家系を見張ることだつて。山の神様はこじらの土地を守るのに疲れたらしいんだけどね。それを狐に代わりにやつてもらおうとしたんだそうだよ……それ以降、村に何か魔物が入り込むたびに狐は張り切つて家系と村を守り続けたんだ。けど、ある日……一瞬の隙をつかれて狐面となつていた狐は鬼にのつとられたんだよ。よわっちいってわけじやない狐は狐面の状態でも狐面をつけていた少女の中に鬼を封じ込めたんだ。だけど、鬼はそれでも暴れてしまつ……こまつた狐は狐面の一族のとある侍を村に呼び寄せて退治してもらつたそつだよ、自分とともに……だけど、これで話は終わらなかつた……まあ、今でもこの町には鬼がいるんだつて話だよ。お互いがお互い、狐面と侍は今でも相手のことを鬼だとおもつてゐるんだ。実際のところはその問題となつていた鬼、滅んじやつてるんだよ。残つてゐるのは思念だけ……だけどまあ、それが一番厄介なのかな？それさえわからばこの町は平和になるんだろうけどね……」

剣治はそういうて立ち上がると首をすくめた。

「これでおしまい……たまにさ、数年に一回ぐらいの割合で行方不明者が出来るつてことがよく予想されるんだけど……先に言つとくよ、今年鬼面をつけた人は既に鬼が存在しないことを知つてゐる。だから、へたに手を出さない限り行方不明になることはありえないと思うね」

「ねえ、剣治、実はさ……」

僕はこの男になら信じられなかつたことを話しても大丈夫なのではないかと思えた。だが、剣治は首を振つて僕がしゃべるのを制した。

「何を言うのかはわからないけど言葉って物は伝染するんだ。その言葉に何か重大な意味がこめられていてそれに僕が気がついてしまつたら……どうなるとおもう?」

「…………」「めん、わかんない」

ため息一つ、若干呆れ気味の表情で剣治はどこから取り出したのかわからないが美少女ファイギュア（女子高生、婦警さん、メイドさん）を屋上に置く。

「ここに、事件を叩撃した女子高生Aがいました」

「うんうん、それで?」

「で、その日の夜に脅迫電話がかかってきたのです。内容は『今日見たことを言えばお前を殺す』と……それで、彼女は事件のことについては知らないといつていきました」

「うん、そんで?どうなったの?」

「彼女は言いつけを守っていましたが、信用できるメイドさんにそのことを言つてしましました……そして次の日、女子高生が殺されてているのが発見されていたのです」

そういう女子高生のファイギュアがゆっくりと倒される。

「さて、この女子高生をこりした犯人は誰でしょう?」

「え?メイドさんじゃないの?」

「正解……まあ、実際のところは誰も彼女がメイドさんじゃなかったといったというところを見てないから確証がないんだけどね」

そういうと剣治はファイギュアをすべてなおしたのだった。とても簡単な話だった……名探偵が出る幕はなさそうだ。

「つまり、君が信用している中に犯人がいるかもしれないってことだ」

「…………あのや、婦警さんのファイギュアを出した理由は?」

「君、一瞬だけこの七尾さんを事件に関係している人だつておもつただろ?」

「そりゃまあ、普通はおもうだろ?あの婦警さん（七尾さん?）がいたのは單なる偶然ではないとおもつたのだが……」

「疑うのは君の自由だけど、今の七尾さんみたいに見た目はとてもその物事に関係あるかも知れない…………けど、実は関係ないってことが良くある。『鬼渡し』だってそうさ。間違えた人を侍が鬼だとおもつて切つてしまえば狐はその侍のことを鬼だとおもつて切つてしまつ。君が勝つべき相手は君自身さ…………所詮人間は鬼ではない。近づくことは出来ても…………ね。『鬼渡し』にはルールがあるといわれているけれどそれ自体だって無いに等しいんだよ。鬼さんが誰かを切ればそこで鬼さんは終わりつてことは変わりないけどね」

剣治はそういうて屋上から去つていった。

「…………」
剣治が言おうとしたことをきつと僕は理解などしていないに違いない。わかつたことといえば僕は誰も切つてはいけない、いない鬼を切れば再び鬼が侍に取り付いたと勘違いをした狐が僕を殺す…………ということだろう。それならば、疑心暗鬼となつている狐と侍はお互に極限状態まで追い詰められているのではないだろうか？

「…………」
僕の陰を見る。陰は静かにだが、確実にあたりを探つている感じがする。そして、僕の脳内に直接語りかけてきたのだった。
『におう、におうぞ…………鬼女のにおいだ』

匂うと言つてもそれは陰のほうだ。僕自身が何か異臭を感じていると言つうわけではない。におつてくるものといえば夕食のカレーベライだらうか？

立ち上がりつてフェンスに手をかけて夕焼けを眺めていると人の気配を感じた。

「あれ？ 天道時君こんなところで何しているの？」

「あ、霜崎さん…………」

後ろに立つていたのは霜崎亜美さんだつた。帰るところだらうか？ 手には鞄を持っている。

彼女は僕の隣に立つて同じように夕焼けを眺めていた。

「ん~夕焼けつていいねえ…………あれ? その狐面もしかして剣治に渡された奴?」

「あ? これ? うん、多分渡したまま忘れて帰っちゃったとおもつ……」

……明日にでもかえしておこうかな…………」

僕がそういうと彼女は頷いた。

「うん、それがいいとはおもうよ。その狐面、持つてるとことないって言われてるし…………」

「え? マジで! ?」

やはり、いわくつきのものだったのか…………剣治、そんなものを僕に押し付けるなよ! とまあ、そういういたかつたが剣治はいないし、既に僕の顔面には先客が張り付いている。この狐面が顔にはりつくということは…………いわば眼鏡の上に眼鏡をつけるというおかしな状況に陥るところことで、さすがにそうはならないだらう。

「その狐面を、つけていろんなところを見ると変なものが見えるんだって」

「へ、変なものって?」

「そうだな」と呟いて彼女は言った。

「とりあえず、人間以外のもの。人間が見えなくなるつていう噂もあるね」

何故そんなに嬉しそうなんだろ? うか?

「…………え? と、何でそんなに嬉しそうなの?」

「あ、私こういつた話大好きなんだ 天道時君は?」

さあて、どう答えたものだらうか…………もしかしたらこの狐面についていいことが聞けるかも知れないし、鬼面のことについても色々と聞けるかもしれない。

「うん、大好きだよ 剣治がいつてたけざいの町にもなんか恐い話があるんだって?」

僕がそう尋ねると彼女は田をきりきりとせながら頷いた。生き生きしているという言葉がぴったりである。

「うん あるよ! 教えてあげようか? それはね…………」

彼女が話してくれた内容と『鬼渡し』については剣冶とさして変わらなかつたが……最後の部分に彼女は付け加えた。

「『』の話つてや、ホントのところ神様を起さないと終わらんないんだよね」

「え？ どつこいつ」と？

驚いて彼女を見ると彼女は言った。

「狐がこの村を守り続ける限り未だに鬼が狐の中にいるつておもつている侍は狐を探し続ける。もとは狐つて山の神様が寝ている間の代役だそだから神様を起させば狐はこの世から完璧に消えて侍もそれを追うようにして消えちやうんだよ」

「ふうん？」

それにしてはおかしな話である。聞こいつと思えばこいやつて町の人に聞くことが出来るのだし、地元の人のほつが郷土については知つてそうなのだが……それならば、何故行方不明者が続いているのだろうか？

「うへん？」

「あ、それとや、『』の話は家に帰つてしないでね？ この話、木曽家の人たちには秘密にしておかないとけないんだからや。……」

「え？ そうなの？」

彼女は深く頷いていった。

「なんかさ、木曽の人には絶対に教えちやいけないんだつて……ええと、狐を切る権利があるからこちらも狐を守る権利がどつたらつていつてたかなあ？」

うへん、と唸つて霜崎さんはそういった。

「じゃ、何で僕に？」

「だつて天道時じやん？ 木曽つて名前じやないからさ」

そんなものなのだろうか？ とおもつて僕はその日霜崎さんと一緒に帰り、途中で別れたのだった。

転校する前は女子と一緒に帰るなどという夢のシチュエーションなど想像もできなかつたのだが、こちらに来て遂にことのときがやつ

てきたか！と思えたのだが……人生というものは一風変わったもので彼女が一方的に恐い話のみを連続してしゃべり、僕はいや／＼空気を味わいながら帰路に着いたのである。

第六話 おや、まだ朝はきてくれないようだね

第六話

「般若つて知つてゐるかい？般若のお面…………君がつけてゐる鬼面はこれとはまた違つた種類のものなんだけどね。般若のお面つて実はあれ、女性の嫉妬心らしいよ」

僕にとつてはどうでもよさげだが、それ関係の人たちには間違いなく常識である知識が丘の上にいる剣治が呟いた。

「崖つぶちの時雨君つてやつだね、これは」

「ヤーヤとした調子で剣治は僕を見る。その表情はまさしくネコがネズミをいたぶるといつよつな感じの表情に違ひは無かつた。

「…………剣治」

「ま、約束どおりここに来たつて言つ」とまといつて集め始めちやつたかい？鬼さんたちを

「鬼さんたちつて…………」

剣治はふつとため息をつくと木曾さんちの方角を指差した。

「ん…………そろそろ来るようだね」

「え？」

何か白いものが飛んできた。そして、目の前に現れたのは狐面をつけた巫女のような服を着た誰がだつた。それは…………僕の夢の中に出てきたあの狐面の人には背丈は似ていた…………にていないところといえば…………言いづらいが、胸の部分。あつちは出でていたがこつちはその…………控えめ？

『まったく、どこを見るんだか…………ちょっと天道時君？』

「あ…………そ、その声つて霜崎さん？」

狐面をつけているから声がくぐもつていたが声には聞き覚えがあつてしまふも、機嫌が悪いようだつた、この狐面さんは…………。

「ははあ、時雨君以前の…………正確に言つと亞美の先輩に当たる狐巫女さんを見たことがあるのかい？」

「狐巫女？」

「そりそり、まあ、確かに世間一般的な平均レベルよりも亞美の胸は大きいわ」

「劣つてない！」

狐面をはずして剣治を一睨み。しかし、剣治は黙ることなく再びしゃべる。その顔がにやりと笑っている。

「けどねえ、胸は小さいけど心は大きいんだよ」

「へえ……ああ、それはわかる気がするな……」「あん、前言撤回させてもいいよ」「み

恐ろしい睨みを僕にきかせて彼女は剣治のほうにも再び睨みを聞かせる。

「ほら！今はそんなことをいつてる場合ぢやないでしょ！」

「ああ、そうだった……実はね、時雨君。君、もうそろそろ行方不明になるかもしねないんだ」

「！？」

「きなりの行方不明予定宣言！僕は言葉を失つて立ち尽くした。

「…………実はさ、これまで行方不明になつてきた人は全員が全員、次の鬼面を自ら作つてあの家においてきたんだよ」

「…………どういう意味？」

たずねると答えるのは霜崎さんのほう。彼女は狐面を頭に引っ付けてため息をつきながら答える。

「実はね、私たちのほうもこれまでずっとそのことについて追いかけてきたんだけど…………この木曽家人たち、これまで鬼面をつけた人たちのことなんだけどね……彼ら、全員が自ら行方をくらましてきたの…………まあ、例外もあるといえばあるんだけど…………自ら行方不明になつているって私たちのほうじゃきいてるわ」「え？」

自分から行方不明になるつて…………なぜだろうか？そこにはどんな理由があるのだろう。

「天道時君の部屋にたくさん鬼が来てたでしょ？」

「うん、確かにたくさんいたね」

「ひじやひじやいた。きっとあの中にはレア物が混じっていた……と考えるのは少しおかしいことだらう。今はそんなことを考えている場合ではない。

「あれ、あそこにずっと鬼が増えていたならどうなるとおもう? いずれ、鬼たちはあの家 자체を実質的に取り潰しちゃうからね。それを知っていたからこれまで鬼面をつけていた人たちは家族のために人知れずいなくなつたんだよ。でもさ、何故か次の鬼面を作つてからいなくなるんだよ」

僕はそれを聞いて再び首を傾げるしかなかつた。

鬼面が無い限りあの家の部屋を覗き込んで別に害は無いはずなのだ。

あの鬼面がかけてあつて今は閉ざされている部屋の中には確かに何かがいる。

ただ、それを確認するには鬼面を着用してぞきぞきとした気持ちではなく、普通に覗き込むだけで見てしまったものは鬼を探して斬るしかないのだ。つまり、この話でキーワードとなつているのは鬼面なのだ。その鬼面を再び作るなんておかしい。……鬼面がなければそれ以上悲劇は繰り返されないはずなのだ。

「それってどういう意味?」

そのようにたずねると剣治は眼鏡を少しだけ光らせて淡々と呴くように話し始めた。

「簡単に言つとあの家はあの鬼面が守つてゐるつていつてもいいね。知つてる? 人間にとつて酸素つていうのは毒なんだけどそれがないと人間は生きられない。……あの家にとつてあの鬼面は絶対にないといけないものなんだ。しかも、不思議なことにその鬼面は作られてまもないはずなのに一年も過ぎればぼろぼろになつてしまつんだけつてさ。……まるで、これまでの鬼面がそこにあるかのようにね……結局のところ、鬼面をつけて時雨君が覗き込んだという部屋を見なければ木曽家は安泰そのものなのさ」

鬼面をつけた人が行方不明になつた人たちはもしかしたらどこか付いている鬼面は焰華ちゃんのお父さんが作った鬼面ということになる。

「…………ん？じゃ、行方不明になつた人たちはもしかしたらどこかで生きているつてこと？」

鬼面を作つているのだ……いや、それは行方不明になる前のことらしいが……だが、とりあえずは逃げるだけだろうから死んでいないだろう。てつくり狐面をつけた人に殺されていたのだろうとおもつていたのだがそれもそれでどうやら外れていたようだ……しかし、漸増さんに渡された本にはそう書かれていたような……

「それは…………どうかな？ずっと鬼はついて来るんだよ、永遠に…………どこかでもしかしたらいき続けているかもしれないけど…………元は鬼面をつけた人は人間なんだ。忌み嫌つている鬼をずっと見たくないつておもつている人たちは自ら…………」

剣治はその先を言わずに首をすくめていった。

「…………とりあえず、今僕たちがするべきことはこれまで続いてきたこの悪い伝統を消すことだね。はじめのほうは確かに間違つた人を切つた人もいたよ。だけど、さすがに僕らの世代までにはどうやつてこの試練というか、なんと言つか……しいて言つなら神様のいたずらを克服するか既にわかつているんだよ」

「ああ、確かに言つてたね…………どうするの？」

僕の質問に霜崎さんが応答をする。

「それはね、山の神様を眠りから覚ませばいいんだよ」

霜崎さんはそういうと狐面をつけてどこかを見た。黙つてしまつた霜崎さんを無視するよつた感じで今度は剣治がにやつと笑つていつた。

「…………その昔ね、神様の祠があつた所は…………今じゃ学校になつてているんだ。僕らの高校、そこが神様が眠つている場所なんだよ」

「！？」

何も言えずに剣治を見ると剣治の近くにいた霜崎さんはとつぶに

姿を消していた。そして剣治は別にどこかにいくことも無く……暗闇を眺めながらいった。暗闇に何かいるとも思えない。

「何でまた、学校なんか建てたんだろうね？ 噂じゃ無理やり作つたつて聞いたんだけどその筋じゃあの学校でもまれに人がいなくなっちゃうことが起きてるつてさ。神隠しつて奴かな？ だけど、これまで行方不明者が出てきたかもしないが来年からはきっと行方不明者がいなくなるはずだよ…… 今年で最後だからね。だから、時雨君、君が特別つてわけじゃない。たまたま最後に鬼面をつけただけつてことさ。それが幸運か不幸なのかどっちかはわからない。未来が見通せる人間なんいたらきっとその人は面白くないだろうからね。人は何のために生きているのか…… 実質、死ぬために生きているんだよ」

「……」
どことなく皮肉めいた言葉を残し、最後にじや、がんばつてねとだけ言うと剣治は闇夜にその姿を消したのだった。剣治がいつた言葉を僕は完全に理解することは出来なかつた。

「……結局は僕にこれから学校に行けつて事なんだろうか？ それに、最初のほうに言つていた僕がそろそろ行方不明になるつて言う理由もまだ聞いてないんだけど……」

一人残された僕は急いでその場から学校へと向かつて走り出した。近くにある森からは鬼さんたちが隊列を組んで僕に迫つてきているのだ。きっとコンビニにたむろしている不良たちよりも見た目的にも実力的にも悪い集団が完成するに違いない。

そんなことになつては色々と問題になるので僕は“土蜘蛛”を持つて駆け出す。街角にまつている鬼に對しては問答無用で切り捨て。な感じで……

「……ぜえ……ぜえ」

何とか学校前には着いたものの、どこからも鬼たちは湧き出でくる。校庭、木の根っこ、近隣の民家の窓からお邪魔しました見たいに感じで……

「一体全体、何体出てくるんだ？」

「囮まれそうになつて…… 空から助けがやってきた。霜崎さんは

あたりの鬼を何かを使って一掃すると僕をお姫様抱っこする。

『…………やつぱり、今回はどこかおかしいよ』

「え？ おかしいって？」

不安そうな表情の（狐面をつけてはいるが）霜崎さんにお姫様抱っこをされていることを恥ずかしくおもうが、それよりも霜崎さんが口にした言葉のほうが気になっていた。

『大体はまだ一年ぐらい大丈夫なはずなんだよ…………もうそろそろ最後だからかな？ううん、大体、木曽つていう苗字の人以外が鬼面をつけたのも今回で初めてだし……』

「最後つて…………大体、何でわかったの？」

思えばおかしな話だ。

今回で最後だつて誰が言ったのだろうか？ まあ、剣治は先ほどいつていたが…………この件に関係している木曽家の人たちだつて未だに全体を把握していないようだつたし、ルールブックはほほ間違いだらけで焚書にしてしまつてもかまわないぐらいなのだ。それに有力な候補というか、鬼を斬ろうといった言いだしつペの僕の陰の中にいる鬼面の侍だつて別に何もしゃべつてはいない。いつぞやはずつとしゃべつていたのにまったくしゃべつていないので、最近は。

僕の質問に霜崎さんはどうしたものかと考えたようだつたが彼女は口を開いた。

『…………剣治だよ、剣治が言ったの。私の従兄で霜崎家の跡取り息子つてことになつてているんだけどこれがまた、おかしな話なんだよね…………なんでも知つているつて言うか、未来が見えている…………そんな感じかな？ 剣治が生まれてからは事故も無いし、予想したことは全部剣治は当てるから』

「どうなんだろうか…………もしかしたら未来が見通せるのかもしないな」と思えたのだが、僕はそうでもないような気がした。

「まあ、今のところは僕たちがすることつて決まつてているんだよね？」

「…………どうだろ？ 今日中に山の神様が眠つているといひ今までいけ

なかつたら明日もまた学校中を探さないといけないんだよ。明日でも駄目だつたらそれこそ「ううつ」と……永遠に「

狐面をはずして僕を下ろす。

その目は真剣そのものでこれからも先こうして深夜に学校に侵入して探さなくてはいけないのだ、神様を……今回で見つかればいいのだが、探して見つかるような神様ならばそれこそ十年ぐらい前には既に見つかっていそうなのである。そして、そんなことを考えていて気がつかなかつたが、気がつけばそこは校舎の扉だつた。

「さて、侵入しますかね……よつと」

どこからか細長い針金のようなものを取り出すと鍵穴につつこんでかちやかちやと鳴り響かせ……

「開いた」

「おおつー！」

あつさりと開いたので少々驚いたのだがこれはこれでいい。別に何かを盗みに来たわけではないのだからこのようなピッキング技術がすばらしいということは黙つておくことにしよう……僕らは中に入り、あたりをきょろきょろと見回すがどこにも鬼の姿は無い。「この学校、仮にも神様が眠つているからね……そうやすやすとよわつちい鬼が入つてこれるわけじやないよ。無論、私と天道時君のどちらかが鬼だつた場合でもそれは一緒なんだ。だから天道時君が鬼面をつけてやつてきた次の日でとっくにわかつてたわけ。学校にはいれなかつたらその場で成敗してたかもね」

「成る程……だから霜崎さんは僕のことを鬼だつて思つていなかつたんだ……ん？でもそれじゃおかしいな……」

僕は以前、漸増さんの部屋に入ることが出来なかつた。それは関係があるのでないだろうか？

「どうしたの？天道時君？」

「ん？いや……」

僕が言つてみどんでいると彼女はすつと近寄つてきて僕の右腕を掴んだ。とつたことで放そうとしたのだが彼女はそれを許してはく

れなかつた。

「……これから先は私たち一人がお互いのことを信頼しないと生き残れない……先代の狐面継承者とその鬼面をつけた人、つまり、焰華ちゃんのお父さんね。ともに学校まで来たつて剣治がいってたの……だけど、鬼面の人は……日を改めるつていつたきり……そのままいなくなつちゃつたわ」

その後、行方不明になつたといつわけね……なるほど、ソニジや人の心も一瞬の迷いのせいはどうかなるつてわけねえ……

「……あのさ、どうでもいいことなのかもしないけど……実は僕、この前……つと、その前に漸増さんつて知つてる?」

誰もいない校舎に僕の声が響き渡つた。しかし、まだまだ夜は明けない。

第十話 ふふ、物語といつものはじか終わるやうや（前編）

さて、今回で終わりとなつてしましました……今思えば非常に駆け足だったなあと思つています。

第十話 ふふ、物語といつものはじつか終わるもの

第十話

一人の少年が地下への階段を降りていた。

「まさかとは思つていたけどこれはいいことになつたね……木曾家の人たちもとんだお宝をみすみす手放すなんて……やっぱり、没落していく家系を見ているのは他家であつても心が痛いね」

その割にはあまり表情が変わりない言い様だつた。

「さて、僕が出来ることといえば何があるのかな?」

少年は地下室の扉を開ける。そこにあつたのはもう一つの扉だつた。

「さつてと……とりあえずあの一人がどうなつたのか……良く見ておいたほうがいいかもねえ……土蜘蛛、ようやく君の主を見つけてあげることが出来たよ、いつてくれ」

少年は暗がりへと視線を飛ばすが、そこから返ってきた返事は文句を言つたのだった。

「え~劍治、何言つてんだよ……これから俺は『テート』なの。野郎の相手をしている暇なんてないんだよ……第一、俺の主は女の子じやなかつたわけ?」

「残念だが九割がた女性つていつたよ。一割は男の可能性だつてあるつて言つただろ?」

「ちつ、どうせお前のことだから実は九割男だつたんだろ?」

「さあ? それはどうだらうね」

劍治は答えずに扉を開ける。

「さ、急いで行つたほうがいいよ」

「いやだね俺にも何かいいことがないと却下だ」

「じゃ、予報してあげよう。彼と一緒にいると絶対に美少女、美しいお姉さん方と会うことが出来る」

その言葉に陰から嬉しそうな返答が帰つてくる。

「ほ、本当か？」

「ああ、本当だ……今度は嘘をつかない」

「よしつ…乗つたぜ…じゃあな」

「ああ、思つ存分エンジョイしていくといこう」

陰の主はすばやく移動するとすぐに扉の中に姿を消したのだった。そして、残されたほうの少年は今度は別の部屋の扉を開ける。そこには『零式』とかかれた鉄の棺桶の様な物があつた。棺桶内には管が通されており、時折聞こえてくる息遣いが不気味さを漂わせている。

「…………さて、どれほどの力を發揮するのかな？時雨君、ぜひとも僕にその成果を見せて欲しい…………」

陰の主が消えた扉にその鉄の棺桶を入れ込む。棺桶に変化は無く、素直に入り、姿を消してしまった。

「…………じゃ、僕もそろそろ行く準備をしないとね…………」

そして、最後にその扉に入つていつたのは謎の少年だったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0054f/>

夢の生まれる場所、心龍の目覚め

2010年10月8日15時33分発行